ふじのくにグローバル人材育成事業　報告書

参加したコース	ふじのくに探求地域探究コース（多文化共生・多様性コース）			訪問国	カンボジア	
学校名	静岡英和女学院	氏名	森千尋		学年	2

私は 2024 年 8 月 5 日から 19 日までの 15 日間にカンボジア王国に滞在して、「弁当ビジネスを通じて SDGs の達成と国際交流は同時にできるだろうか」という問いのもとで、探求活動を行った。

この「ふじのくにグローバル人材育成事業」を通じて、日本の官僚組織の弊害を多く見ることができた。あまりに多くの同じような書類を、普通の学校の活動だけではなくて、部活やテストや塾などで朝から夜まで忙しい高校生が処理することはとても大変で、現実的ではないことを知って欲しいと思う。応募書類の時点で、あまりに膨大な書類を提供された時点で、私たちは応募をやめるべきだったのだろうか。海外に関心を持って、そこへ踏み出したいと思う生徒は多くはないのにもかかわらず、このような書類を求めることで、それを阻害していることをぜひ知って欲しい。もっと簡素化をして、もっと応募者を増やすことを考えて欲しい。

私たちは大人が決めたルールを守ることで成長するのではなくて、そのルールを破壊して、新しい将来を作り上げていくのだ。決して決められたことを、そのまま受け取るだけではない。この人材事業をより良いものにすることも、私たち一期生が未来に向けてできることだと思う。ぜひ書類で私たちを管理しようとすることは止めて欲しい。

私を受け入れてくれた banana leaf の女性起業家も、私の滞在を受け入れて、いろいろな女性零細ビジネスを紹介してくれた女性も、全て知人だから対応してくれた。それを

受け入れることで、お礼はしたものの、それ自体がビジネスではなかった。

banana leaf はいわゆる社会的企業で、社会的弱者であるはずの女性が、女性を雇用して、その女性の自立を支援し、環境負荷を抑えている。このように SDGs に配慮したビジネスを運営しており、カンボジア国内でも賞賛されている。その意味でとてもわかりやすい理念を正しく実行している。日本でも理解されやすいし、同じことを実現することは可能だと思う。経営者のラミーの夫も世界銀行の広報を担当する映像関係のプロフェッショナルで、カンボジアの中流以上の人たちだ。この弁当を買う人たちも貧しい人ではない。

それと比較すると私がホームステイでお世話になった女性ダダは、ポルポト時代で強制権婚をさせられた親が貧しく、教育は兄が支援してくれた人だ。とても家族思いで、親切な人だ。写真は彼女が通った日本の支援でできた学校だ。彼女は大学まで兄の支援で通い、政府に勤務して、その後オーストラリアで多くの友人を作り、ネールサロンを成功させている。彼女がカンボジアに帰国しているときに私は彼女にお世話になり、彼女の知り合いの女性たちが立ち上げた零細ビジネスをいくつも見学させてもらい、インタビューもさせてくれた。私がお世話になった家にはシングルマザーとその子供 2 人（女の子と男の子）が住んでいた。不思議な関係だ。

午前中はラミーたちの中流の生活を見て、それ以外の時間はダダと比較的貧しい人たちと一緒に暮らすことができたのはとても興味深いものだった。場所もプノンペンの官庁街と郊外と違うし、観光客や外国人はいないものの英語が比較的通じる人たちと、ほぼクメール語の世界が両方体験できたのは、本当によい経験だった。

ダダは教育の重要性、カンボジアの社会や習慣について、オーストラリアと比較しながら教えてくれた。私も将来多民族国家のオーストラリアにも留学したいと思った。

とても貴重な経験ができたのだが、これは家族の支援が大きかった。こういう恵まれた環境にいる私が「社会」の問題を、本事業を通じて具体的に知り、それを解決していくためのきっかけになったことには感謝したい。